
なっちゃんえ

闘神自殺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
なっちゃんえ

【Nコード】
N3845Z

【作者名】
闘神自殺

【あらすじ】
時を越えた親子の骨肉の争い。

大学での単位との戦いも無事に終わり、陽気につられひさしぶりに街で休日を満喫してたときだった。

「こんにちわ。わたしモモリー！ 未来から来たの！」

「あん？」

不意に妙なちびっ子に話しかけられた。

俺の目の前でどーだいと云った様子で胸を反らしている、モモリーと名乗ったちびっ子は、手に『威力棒（任天堂Wi-Fiのデザインをパチッた中国製粗悪品。ちよっとした冗談で親戚の子供に与えると、狂喜した後に口を利いてくれなくなる可能性が高いので注意が必要である）』のような物体を握り、最近巷で流行ってる魔法少女のようなコケティッシュで可愛い格好をしている。不可解な発言もあったので正直、関わりたくないと思った。

「アナタはタクロー！ わたしのお父さん！」

「はあ……そうですか」

いきなり名前を言い当てられてドキッとしたが、ちよっと考えて、大学仲間の誰かが手の込んだイタズラを企んだのだと納得する。

まあ、そんなに悪意あるイタズラじゃなさそうだ。子供相手にどうこうするのも大人気ない。どうせ大した予定ないし、暇つぶしにちよっとだけ付き合ってやろうかな。

「お父さんは三十年後の今日、わたしを遊園地に連れてってくれる約束してたのに、急なお仕事があるって言って破ったの！」

「そうか……それは俺がヒドイな。なんかごめんな」

モモリーが道端でムキーと地団駄を踏むので、俺は通行人の邪魔にならないようモモリーを抱き上げ、ガードレールの上に座らせてから優しく頭を撫でてやる。

「うーん……」

髪を掻き分けて耳元の辺りを撫でると、モモリーはくすぐったそ

うに肩を竦めた。

(うんうん、カワイイもんだ)

俺に子供ができたらかんな風に休日を過ごすのかなあと、冗談と解っていてもほのぼのしてしまう。

だがその次の瞬間、モモリーは胸元で握り締めていた威力棒を振りかぶり――いきなり俺に襲い掛かって来た。

「死ぬがいいの!!」

「うおっ!」

絶頂時の松井級のスイングが俺の顔面の真横を振り抜いた。

一瞬早いタイミングで殺気を感じ、ギリギリのところで避けられたが、モモリーが何故こんなことをしたのか、俺にはさっぱり理解出来ない。

「な、何をするんだ!」

「腹いせなの! 約束破るお父さんは悪い子なの! わたしに頭蓋骨粉碎されて、後悔しながら黄泉路を踏むの!」

「黄泉路!」 お、俺はキミのパパだろ! さっきの設定からすると、俺を殺すとキミも大変ヤバイんじゃないのか!? 俺が死んだらキミは未来で産まれないんだぞ!!」

メジャー級のフルスイングで鼻先かすめられた俺は恥も外聞もなく取り乱し、歳も背も自分の半分にも満たない幼女に対し、必死で命乞いをする。

「わたしが存在している時点で、わたしが存在する世界は既に確定しているの。過去に戻るとその時点で過去は、わたしが来た未来と連続しないべつの世界に分岐するの。ようするに、未来から過去に対する干渉はオールOK! 何しても未来には影響が起きないの!」

「だからって、殺すこたあないだろ!」

だが俺の制止も聞かず、モモリーは『威力棒(もう名前が固定している)』を振り回しながら果敢に俺を殺りに来る。

「くっ!」

とてつもなく速いが、なんとか避ける。

未来うんぬんは信じてないが、それを別にしても死の危険が迫っているのは間違いなさそうだ。

ドコッ！

モモリーの威力棒がポプラ並木に直撃した瞬間、轟音と眩い閃光が疾り――その次の瞬間に発生した凄まじい爆風が俺の身体を吹き飛ばした。

「うああああ！？」

俺はなす術もなく、ビルの壁に激しく打ち付けられた。

「うぐう……！？」

後頭部の鈍痛にうめきながらも必死に立ち上がろうとすると、メキメキと音を立てて倒れるポプラを目の当たりに。

あ……あれがまともに当たったら。

想像するだけでゾツとした。

「往生するの！」

モモリーは体操選手のように身軽に跳び回り、逃げ惑うサラリーマンの背中に跳び移ると、ポシエットから取り出した紫色の縄を手早くおっさんの首に巻き付け、何やら呪文のようなものを唱え始めた。

「ゲコマコマヤコン、ゲコマコマヤコン」

「ウギョギョギョー！」

耳元で呪文を囁かれた途端、サラリーマンがカツと目を剥き、首筋をひっ搔いて苦しみだした。恐怖のあまり声も出ない俺は、その異様な様子を呆然と眺めることしか出来ない。

「死者転生の魔法ー！！ おまえ、『くま』になっちゃえー！！」

苦しみ悶えていたサラリーマンの背広が突如、アケビのようにパツクリ割れ、モモリーはそこから素早く跳び退く。

サラリーマンの背中の割れ目が、ミカンの皮を剥いたようにめくれ上がり、内側の、ドロドログチョグチョした紫色の脈打つ内臓が

裏返ると、その全身を饅頭のようにスッポリ包み込んだ。

ドクン ドクン

生きた心臓のように激しく脈打つ肉塊。

そうしてしばらくすると、中から響いていた幽鬼のようなうめき声が止み、遠巻きに窺っている野次馬が騒然とする中……それは生まれた。

「クマー！」

グロテスクな肉の皮を突き破って出たモノは、全身ブルーの毛並をした、巨大な熊のような生物だった。

デカイ。白熊並にデカイ。

立ち上がって両腕を振り上げた姿は、余裕で大型トラックの車高を越えている。

「クマー！ クマー！」

クマを主張してやまない怪物は下腹に響くような物凄い咆哮を上げ、獲物を追い求めるよう血に餓えた瞳を見開く。

「なっちゃえ！ マイコーになっちゃえ！！」

「ポウッ！」

俺が大暴れするクマに呆気にとられていると、いつの間にか縄で捕らえられた老人が、モモリーの呪文によって、帽子を目深に被り颯爽と立つマイケル・ジャクソンに変態させられてしまった。

「うおっ！？ な、なんてことをしやがるんだ！」

と言いつつ、内心では「いいぞ、もっとやれ！」と思う自分もいた。

「ぷれすりー！ プれすりーになっちゃえ！」

「ラブミー♪」

捕らえられた丸刈りの野球少年が、内蔵に包まれてエルヴィスに変身。

ポップ・キングに次いでロック・キングの雄が復活した。エルヴ

イスはしきりに髪型を気にしながら、路肩に停めてあった違法駐車
のペスパ盗んで走り出す。

「ポウッ！」

「あ、サインください」

サインを快諾してくれたマイコーと別れて戦場を振り返ると、一
方でモモリーは、軽自動車を縛り上げ、化け物へと変えようとして
いた。

「車になっちゃえ！ トヨタ車になっちゃえ！」

「リコール！！」

どう考えても内臓の容積を遥かに超えている”例の車”が肉の塊
を突き破って飛び出し、そのままモモリーをボンネット上に乗せる
と、ブレーキパットをキュルキュル鳴らしながら片輪走行で歩道橋
の階段を駆け上がった。

「おい、車は無機物だろ！？ つーか、トヨタ死んでないよ！？」

「未来じゃ、外資に吞まれて跡形もなくなっていたの」

「縁起でもねえ！？」

「ボンネット開けると内臓がぎっしり詰まってるの」

「こわっ！？」

モモリーがトヨタ車のボンネットを開くと、ギッシリ詰まった紫
色の内臓がウネウネと蠕動していた。俺が吐きそうな顔をしてえづ
くと、モモリーはとても満足げな顔になり、歩道橋の上から飛び降
りて、今度は子供づれの母親の肩に跨った。

「なっちゃえ！ とばそうじようになっちゃえ！！」

「鳥羽ー！！」

「ママー！？」

天喜元年から保延の時代を駆け抜けた日本仏教界屈指の高僧が、
握り締めた両の拳を天高く突き上げ現代に甦った。勝手に輪廻転生
しないで欲しい。

「とばそうじようになっちゃえ！ なっちゃえ！ とばになっちゃ
え！！」

「鳥獣人物戯画!!」

モモリーは鳥羽僧正が気に入ったのか、逃げ惑う人々を投げ縄で拘束し、グロテスクな内臓の素から次々と僧正を量産する。

「とばーっ! とばになっちゃえ!! ごとばになっちゃえー!!」

「ちよっ……鳥羽多すぎ!? どんだけ鳥羽に固執してんだよ!?」
モモリーの魔法によって、たちまち街は怪物で溢れかえった（主に鳥羽）。

怪物は人の理性を失ってしまっているようで、次々と人々に襲い掛かり、それを容赦なく喰らっている。

「うう……」

そして俺の周りでは、数十の鳥羽と一体の後鳥羽天皇が念仏を唱えながら結集し、その包囲を徐々に狭めて来ている。

「くそ!!」

鳥羽なぞ元は新興宗教の教祖風情だが、今となっては歴史的偉人。いろいろな意味で迂闊には手は出せないぞ。

だが、このまま殺られてしまうわけにはいかない。

なぜなら——明日、ヒットスタジオに戸川純がでるんだ。

俺はいよいよ覚悟を決めて拳を握った。

強引に包囲を突破して大元であるモモリーを叩くつもりだ。

正義を以って大儀を為すのである。

「いくぞ!! うおおおおおっ!!!!」

「来いな!!」

戦うことで切り拓ける未来があると信じて!!

おしまい!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3845z/>

なっちゃんえ

2011年12月13日00時59分発行